

日本記号学会 編

賭博の記号論

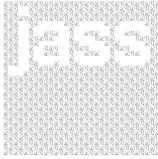


賭ける・読む・考える

「賭ける」とは
どういう記号的行為なのか？

「賭ける」という人類発生とともにある行為は、
なぜ人々を魅了しつづけるのか。

その魅力に論理的に迫った哲学編、伝説の競馬実況者にその秘密を聞いた現場編、そして麻雀・ゲーム・競馬・パチスロなどを「見る／読む」の次元まで含めて考察したメディア編など、「賭博」「賭けること」の魅力と意味を記号論的に考察する。



叢書セミオトポス 13

日本記号学会 編

賭博の記号論

賭ける・読む・考える

新曜社

刊行によせて

日本記号学会会長 前川 修

叢書セミオトポス13『賭博の記号論』は、二〇一六年に大阪大学で開催された日本記号学会第三六回大会の内容を元としている。

*

今回は「賭博」がテーマである。

今から思いかえしてみれば、この大会を開催した二〇一六年は、メディアで賭博がことさら話題になった年だった。オリンピック代表になっていた某競技のスポーツ選手たちが違法カジノでの賭博を理由に処分されたり、プロ野球選手「自身」による野球賭博が発覚したりなど、相次いで賭博がらみのニュースが報道された——「カジノ法案」とも呼ばれるIR推進法が国会で可決されたのもこの年であった。報道では、これらの事件へのコメントとして、スポーツ選手における善悪判断の欠如とか、スポーツ界のタニマチ的体質の問題とかが、その真偽が確認される間もないまま、主張されていた覚えがある。

これに限らず、こうした賭博報道の機会にいつも話題になるのは、賭博の合法／違法のそもそもの線引きが曖昧であるとか、賭博を構成する二つの要素——「賭事」（参加者が結果に関与できない「運」のゲーム）と「博戯」（参加者が結果に関与できる「技」のゲーム）——の区別の問題とか、さらに

は、刑法における賭博罪の規定の曖昧さとか、公営ギャンブル容認の理由（公益性）についての異論とかである。

こうした、あまりにも賭博の面白さに目を向けない賭博論に対して、賭博「原」論的な議論もある。そもそも文明の起りには賭博があった、太古において自然のなすがまになつていた人間はそのつど神の意思を確認すべく祭儀を行ったのであり、そこから派生したものが賭博なのである、到来する運への無根拠な信仰⇨賭けという行為、それこそが、勝つか負けるかには関係なく、賭博においては重要なのだ、賭けることは生きることである……こんな、少々実存主義的な色合いの濃い、熱い賭博論もたしかに多く耳にされる議論である。

他方、まったく別の立場をとるのが、本大会実行委員長を務めた檜垣立哉『賭博／偶然の哲学』（河出書房新社、二〇〇八年）である。哲学者でもある檜垣は、自身のフィールドワーク（競馬）に基づきながら、「賭博／偶然」という問題を現在の文脈から鮮やかに切り出している。おそらく同じ主張は本書の檜垣の「I部序文」でも繰り返されるはずなのでここでは手短かに書いておくが、リベリズムの浸透と予測計算可能性の増したテクノロジーの進展のなかで、あえて主体自身のうちに織り込まれた無限を前提にして、頻りに課される自己責任性やリスク計算を越えていく行為、いまここにおいて無限と触れ合い、無限と積極的に戯れる所作、それが賭けという遊戯である、そう同書は主張している。賭博／偶然は、実は現在のリスク社会やリベリズムに偏る思考に転換をもたらす契機となるかもしれないのである（本大会の企画立案の基礎にもなっているので、同書に興味をもたれた読者には、一読をお勧めしたい）。

*

さて、このように賭博をめぐる議論をネットであれこれ調べていると、以上のような議論も含め、大

大きく三つの種類の賭博本があることが分かる。もっとも多いのが「賭博攻略本」、それに続くのが「賭博師列伝もの」であり、そして現在増えつつづけているのが賭博「依存症」本である。最後のものは、アカデミックな著作（たとえば心理学、法学、歴史学、社会学、経営学、統計学の賭博研究本）のなかで着実にプレゼンスを増しつつある。化学的アディクションではなく行動的、技術的アディクションとも称されるギャンブル依存症は、今では深刻な病い治療の対象とみなされているようである。

これに関連することだが、脳科学を参照した依存症研究の分野では、一時期「報酬系」という語が流行した。それは、脳のなかのドーパミン神経系であり、発火してドーパミンを放出させることで快を感じさせる部位のことである。広く生物の学習や環境適応に重要な役割を果たしているこの回路の活性化が、こうした研究では、依存症の核にあるとされているのである。

そのなかで興味深いのが次のような有名な実験である。

サルに緑と赤の二種類の光を見せ、緑の光を見せた時には直後にシロップ（報酬）を、赤の光の時には何も与えないという訓練をする。何度か試行すると、緑の光の場合には、点滅時に報酬系が発火するようになる（赤の光では当然発火しない）。次の段階として、今度は青い光を点滅させ、その直後に50%の確率で報酬を与えることにする。この訓練を続けると青い光の点滅直後に発火が始まり、それでおさまるところか次第に発火は高まっていき、光が消える際に最高度の発火レベルにまで高まる、そうした結果が得られたそうである。

お分かりのように、スロットやルーレットが回ったり、レースが始まったり、くじの抽選が行われたりしている賭けの中間過程が、この緩やかな強度の発火時間帯にあたる。この実験（および人間を被験者にしてこの仕組みを応用した実験）の結果からは、見返り（報酬）の不確実性そのもの、つまりリスクのある出来事から、サルを含めた哺乳類の脳はなぜか快感を得るようになってきているということが分か

るのである。

また、ギャンブルに深く関わる、「ニアミス効果」と「直接介入効果」についても、上記の応用実験では研究がなされている。ニアミス効果とは、惜しい負けがギャンブル継続の要因になるという問題であり、直接介入効果とは、ギャンブルの参加者が実際は当たり外れには無関係なのに、その当たり外れの過程に何らかの関わりを少しでももつと、ギャンブルを長く継続し、なおかつ賭ける金額も増えることになるという効果のことである。どちらも見ると、ギャンブルにまつわるきわめて非合理的な信念なのかもしれない。しかし、それにもかかわらず、この二つの非合理的な信念が実験によって証明されたという。

あくまでもある研究者の見解なのだが、ここで紹介したような不確実性への期待やニアミス効果に見られる報酬系の活動は、系統発生的にも意味があるのだという。進化における適応のうえで、賭けは忌避すべきものではなく、むしろ生物が環境に適応し、生存し、進化していくうえでひとつのエンジンになっていたと考えることもできるのである。この進化の重要なモメントが前景化したもの、それが他ならぬ賭博だということになる。

こうした報酬系ないし快感回路は、驚くことに、生物の進化のかなり早い時期から具わっているらしい（Cエレガンスという体長七ミリの線虫にすでに報酬系はあるという）。もちろん人間の場合には、快感回路にさらに複雑なしかたで判断や計画や情動や記憶の保存がかかわり合い、複層的な時間的過程がそこに作用していることは言うまでもない。デイヴィッド・J・リンデン『快感回路——なぜ気持ちいいのかなぜやめられないのか』（河出文庫、二〇一四年）によれば、そうした記憶や連想、感情や社会的意味のない、言うなれば、何の色も音も匂いも欠いた快感がたとえあるにしても、それは無味乾燥な「灰色」の快感にすぎない、と言う。賭博の快はそこにはない。それはむしろ快感回路と他の中核

(とその諸帰結)とのあいだの隙間にあるのだ。

おそらく——脳科学的議論とはまったく違いかたちだが——「賭博の記号論」によってあぶりだされるのは、こうした隙間にある賭博が快を拡散させながら、複雑なしかたで発火をしつづける、現代的な記号過程のありさまなのであろう。

賭博の記号論——賭ける・読む・考える*目次

刊行によせて

前川 修 3

I部 賭博の論理・賭博の現場

1 I部序文 賭博の論理・賭博の現場

檜垣立哉 14

2 事実性と様相の潰れと賭け Factuality, Modal Collapse and Wager

入不二基義 18

3 競馬実況における「賭け」——杉本清・元関西テレビアナウンサーを囲んで

杉本清・植島啓司・坂井直樹(司会・檜垣立哉) 45

4 付論 杉本的競馬実況についてのメモ

檜垣立哉 62

II部 賭博のメディア論——ゲーム・競馬・パチスロ

1 II部序文 賭博を見る／読む

佐藤守弘 74

2 ギャンブルに賭けられるものは何か——ゲーム研究からの考察

吉田 寛 79

3 「名馬」を必要とする社会——競馬をめぐる〈夢〉の遠近法

瓜生吉則 97

4 ギャンブルマンガのメディア論

——『パニック7』という名のパチスロマンガ雑誌が賭けたもの

吉村和真 118

Ⅲ部 記号論の諸相

1 「投射」を手がかりにした「アダクション」の分析と展開

佐古仁志

144

2 現代建築における新ライプニッツ主義的实践

——入江経一とサミュエル・ベケット

佐原浩一郎

159

資料 日本記号学会第三六回大会について

執筆者紹介

178 176

装幀 岡澤理奈
装画 佐古伸行

I
部

賭博の論理・賭博の現場

I 部序文 賭博の論理・賭博の現場

檜垣立哉

「賭博の記号論」と題された日本記号学会の第二部は、二つの対照的な企画から構成された。

賭ける、ということについてはさまざまな問題系がある。パスカルの賭け、ドストエフスキーの博徒たち、ベイズ理論に基づいた近年の確率論、イアン・ハッキングの確率主義、社会学のリスク論、これらは過去から現在にまでひきつづく賭けに関する一貫した問題系をかたちづくっている。賭けの哲学は、まずは「現実」とは何か、この不安定で必然性によつては覆い尽くせない世界はどうしてこうあるのか、一回何かが出現してしまうと（確率的に小きいものであれ）それ自身は取り消しえないリアルとなるのはどういふことかなど、記号論とも連関した膨大な領域を覆うものである。もちろんこれに、人類学的にどこにでもみうけられる、いわゆる遊戯としての賭けの諸形態がかさなることも確かだろう。

ただこの分野の議論を考えるうえできわめて重要な文献は、日本における九鬼周造の『偶然性の問題』であるとおもう。そこには、この問題に対応する二つの側面がよく表されているからである。

この著作のなかで九鬼は、一種の偶然性の論理学を展開する。それは現在の洗練された議論からみれば相当に古い新カント派に依拠したものである。だがそこでは、論理学的・記号論的に「偶然

性とは何か」という問題が、必然性、可能性などの様相論との関連で問い詰められている。定言的偶然、仮說的偶然、離接的偶然というきわめて論理的な図式を基盤に、九鬼は偶然性について考えぬく。偶然論は、一面きわめてロジカルな問題なのである。

だが他方、九鬼自身が『(へいき)の構造』で名を馳せた哲学者であることからわかるように、この書物自身、きわめて情緒的な内容に満ちている。九鬼の記述のなかで、偶然性をしるしづけるきわめて強いものは「驚き」なのである。瓦が落ちてきて、前に転がっている風船に当たって驚く。旅行をしていて、切符をみるとある数字が記されていて気に留めずにいると、旅先のホテルの部屋も同じ数字で、他にもこの数字が何度も現れる。気味が悪い。これも一種の「驚き」に似た情動である。そしてこの驚きがわれわれの生のリアルを構成していることには、誰も疑いをいだかないだろう。

賭けることとそこで現れる偶然は、こうした二面性をつねに備えている。それは厳密な論理の問題でありながら、われわれのリアルに通じるものである。

さて、「賭博の記号論」と題された記号学会第一部では、この二つの側面を示すために、二つの企画を並べさせていただいた。

ひとつは、青山学院大学の入不二基義さんの講演である。ここに収められたテキストは当日話された内容を変更されたことだが、入不二さんは、一貫して英米系の分析哲学に通じる論理学的思考を駆使しながら、時間や運命、一回性や偶然性、「この私」や「このもの」が他の何ものでもないことについて多くの考察をなされてきた。檜垣が入不二さんをお呼びする機縁となったのは、著作『時間と絶対と相對と』（勁草書房、二〇〇七年）や『あるようにあり、なるようになる』――

運命論の運命』（講談社、二〇一五年）など、きわめてロジカルな思考を展開しつつ、運命性や、「どうしてこうなるのか」という、まさに賭けに関する直感を見事に整理し目を開かせてくれる著作をものさされているからである。それらは論理的に切れ味がよいというだけではなく、論理的に考えれば考えるほど、この世の不思議さがきわだってしまうものなのである。この企画を構想したときに、やはりまずは入不二さんにご登壇願うのが筋ではないかとおもわれた。

ただし、ある種の実践的文化事象をとりあげることが日本記号学会のひとつの側面でもあるので、次の企画は思い切りスタンスを変えてみた。ここでは、長年にわたり関西テレビで競馬実況を担当し、伝説の「杉本節」を確立させた杉本清・元アナウンサーをお招きし、杉本さんを中心に、京都造形大学教授で宗教学者でありながら競馬予想やテレビにも多く携わった植島啓司さんと、『週刊競馬ブック』誌の現役トラックマンである坂井直樹さんをお交え、司会者の檜垣も絡むという鼎談プラスワンのような方式をとって、競馬の実況という具体例に即しながら偶然性について考えてみた。これは、檜垣自身が競馬で書物を二冊書いたという経緯（と人脈）によるものでもあるが、ここでポイントとなるのは、競馬という具体的な賭けにおいて、実は賭けているエージェンツには馬券を買っている者や、馬主、調教師、競馬予想屋だけではなく、「実況放送」というのもそうした事象にかさなるのではないかという問題意識である。杉本式競馬実況は、テレビ中継の世界ではすでに「古典様式」ともいえるが、そうとうな決め打ちを行いつつ、しかしとつさの判断で実況の言葉を切り替えるあり方は見事としかいえないようがない。そのなかで「杉本節」の決め台詞が炸裂するのであるが、それはいかなるタイミングででてくるのか、懐かしい映像（古くはエリモジョージの天皇賞から、杉本さんが関西テレビの実況に携わっていた一九九〇年代後半まで）を、実際にビデオで振り返りつつ語ってもらった。スポーツの実況そのものが、展開されるさまざまな事例

を予想外に「正確に」伝えるためのものである以上、必ず賭けに関連せざるをえないだろう。競馬中継はその意味で二重のギャンプルになっている。

この企画は、日曜のオークス予想に終り、まさに予想「記号」が散乱するという意味で記号学会にふさわしいものであったが、鼎談ということもあり、そのまま載せると膨大な量（と逸脱）を含むため、檜垣の方で相当に編集させていただいた。

入不二論考の論理性と、競馬実況の現場性、この二つをかさねることで、賭けや偶然性のもつ論理と情動が繋がる地点をどこかで明示できればとおもった次第である。

事実性と様相の潰れと賭け

Factuality, Modal Collapse and Wager

入不二基義

本論文は、「事実性^{*1}」と「様相の潰れ・確率の潰れ」と「賭け」の三者を、同種の中間的なものとして描き出そうとする。三者はいずれも、現実性とシステムが闘ぎ合い拮抗するところに出現する中間であり、両極性を持つ。

現実性とシステムとその中間を考察するために、各章（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）では、以下の題材を扱う。Ⅰでは、ラッセル的拒否感（命題は様相を持たない）を素材にして、現実性と様相の中間に、事実性を位置づける。Ⅱでは、様相の潰れ（現実 \parallel 可能 \parallel 必然 \parallel 偶然）と確率の潰れ（現実の確率は常に $1/2$ 、確率の値は現実には意味がない）に注目して、現実性によってもたらされるシステム内の歪み（潰れ）としての中間を考察する。Ⅲでは、選択と賭けと祈りを比較対照する。システム内で安定的に働く「選択」から始めて、そこから逸脱していく方向性を持つ「賭け」を経由して、神 \parallel 現実性を志向する「祈り」までを辿る。この辿りの遂行を通じて、賭けの中間性を浮かび上げさせたい。

*1
本論文は、日本記号学会第三六回大会（二〇一六年五月二一日・二二日／大阪大学）「Bet or Die 賭博の記号論 セッション1 賭けることのロジック」における、筆者の講演「偶然と必然と様相の潰れ」（原稿は作らずにスライドのみを使用）に基づいている。しかし、その後の考察の進展を加味して、新たな構成で書き下ろしたため、当日の発表内容とはかなり異なっている。

I 事実性と様相

1 否定と最小様相

B・ラッセルは、様相（可能や必然など）を、命題ではなく命題関数を持つ性質として考えていた。^{*2}「ソクラテスは哲学者である」のような命題に適用できるのは真理値（真・偽）であって、様相（可能や必然など）ではない。様相を持つことができるのは、「xは哲学者である」のような空所を含む命題関数である。xに何を代入しても真になる場合には「xは哲学者である」は必然であり、xに代入できるものが少なくとも一つある場合には「xは哲学者である」は可能であり、xに代入できるものが一つもない場合には「xは哲学者である」は不可能である、というように考えていた。

このことは、様相と空所性のあいだに関係があることを教えてくれる。ただひたすら真なる事実を表現するだけで、そこにいつさいの空所性が含まれないならば、様相が入り込む余地はない。「ソクラテスは哲学者である」に可能や必然は適用できないと感じられる理由（の少なくとも一つ）は、端的に成立している事実は、「空所」があつたうえで埋めるという迂遠な操作とは無縁であつて、予め充実していると感じられるからだろう。様相が成り立つためには、そのような端的な事実への密着状態からは距離を取って、相対化できなければならぬ。「ソクラテスは哲学者である」という命題とは違って、「xは哲学者である」という命題関数には、そのような距離化や相対化が目に見える形で、すなわち「x」として含まれている。

だからこそ、「ソクラテスは哲学者である」の内にも何らかの空所性が見つかるならば、命題に

* 2

Bertrand Russell, "The Philosophy of Logical Atomism," 1918, repr. in *Logic and Knowledge*, George Allen and Unwin, 1956, pp.177-281; Bertrand Russell, *Introduction to Mathematical Philosophy*, George Allen and Unwin, 1919. ラッセルの様相概念の扱いについては、以下を参照。飯田隆『言語哲学大全Ⅲ 意味と様相（下）』（勁草書房、一九九五年）九一—一頁・三浦俊彦「必然・可能・現実——様相の形而上学」『岩波講座 哲学2 形而上学の現在』（岩波書店、二〇〇八年）九三—一一頁の「1 命題関数の性質としての「様相」」。